

先ほど読んでいただきました本日の旧約聖書には、信仰の父として有名なアブラハム夫妻のもとを主なる神が訪れ、アブラハムたちがそれを丁寧にもてなしたこと、そして主なる神はアブラハム夫妻に、子供が生れる約束をくださったのでした。高齢になるまで子供に恵まれず、二人の心にはその事実が大きな傷となっていました。すべてをご存知である主は、その傷の癒しと喜ばしい訪れを二人にもたせられたのでした。主は人知を超えてすべてをご存知であり、一番の必要を満たすことがお出来になる方です。

ルカによる福音書の記述によれば、主イエスが十字かにかかるためエルサレムへ行く決心をされたのはかなり早くのことであり、かなりの部分はそのエルサレム途上の出来事として記されています。本日の福音書の箇所もエルサレム途上の出来事でした。

二人の姉妹のうち、姉のマルタは主イエスをもてなすことで精一杯、忙しく働いていました。ところが妹のマリヤは主イエスの話しにじっと聞き入っていて姉を手伝おうともしませんでした。猫の手も借りたい現状に姉は妹に腹を立て、主イエスに注意をしてくれるように言ったのでした。ところが意外にも主イエスの答えはマリヤへの注意の言葉ではなく、逆にマルタに注意を促す言葉だったのです。

マリヤが、しかも姉ではなく妹が、家事の手伝いもしないでいたというのは、許されることではなかったでしょう。しかし主イエスはそのマリヤの行いを義とし、マルタに多くを思い煩っていると注意されたのでした。普段なら考えられないこのような出来事がなぜ起こったのでしょうか？。

主イエスがマルタ・マリヤに出会ったのは、十字架へかかるためエルサレムへ向かっていた途上でした。主は、3年近くの間、ガリラヤ湖西部一帯、いわゆるガリラヤ地方と呼ばれる町や村で宣教をなさいました。人々に天国を宣べ伝えられたのです。町や村は主イエスを最初歓迎しましたが、それは主イエスをこの世的な支配者、圧政を強いているローマ帝国に毅然と立ち向かって自分たちに楽な暮らしをもたらしてくれる者にしようとしてのことでした。しかし主イエスがそれを受け入れようとしないのを知ると、人々は落胆し、主イエスを相手にしなくなってしまうました。自分の都合の良い救い主以外に用はないという民衆の態度だったのです。

エルサレムへ向かう決心をされた主イエスが、一番必要としていたのは何だったのでしょうか。それは天国を受け入れようとする人に一人でも多くその約束を与えることでした。また天国を受け入れる人を一人でも増やすことでした。決して豪華な食事やもてなしではなかったのです。

私たちは奉仕を使用とする時、この大きな示唆を与えてくれます。自分がどんなに一生懸命したとしても、大きなエネルギーを使おうとも、それが相手の必要と異なっていたら、主のみ心と異なっていたら、それは義とされることではないということなのです。奉仕は自分中心の心を離れ、本当に必要とされていることをしっかり見極めて行うべきことが教えられているのです。マルタは一生懸命もてなしをしましたが、それは主イエスの今必要としていることと異なっていました。自分中心の業でしかなかったこと、主はマルタの業をお喜びにならなかったこと、マルタはそれを知らねばならなかったのです。

アブラハムが一番必要としていたこと、一番望んでいたことに主なる神は的確にお答えになりました。私たちは教会の業をなすとき、本当に主なる神が何を命じておられるのか、使命を与えておられるのか、それを知る心が与えられるよう、祈りたいと思います。御心にかなう業とは、主なる神はもちろんのこと、相手にとっても一番よいことであるからです。